

『就実教育実践研究』第13巻 抜刷
就実教育実践研究センター 2020年3月31日 発行

総合的音楽活動を通じた「表現」の授業実践

A study of the class of expression based on effective music activities

秋 山 真 理 子

総合的音楽活動を通じた「表現」の授業実践

秋山真理子（幼児教育学科）

A study of the class of expression based on effective music activities

Mariko AKIYAMA (Department of Preschool Education)

抄録

本稿は、保育を学ぶ学生の豊かな感性や表現する力を養い創造性を豊かに育てるために、「表現Ⅱ（音楽表現）」でおこなった授業実践を振り返り、表現教育のあるべき姿を論じたものである。授業実践は、手作り楽器の製作から合奏、ドレミパイプの導入という過程を経て、総合的音楽活動に至るものである。様々な活動を組み合わせた総合的音楽活動を通して、学生は、音楽への興味や好奇心を高め、音楽的な能力の向上の他にも、楽器を作る上での創造性や思考力、皆で合わせる上での集中力や協調性を身につけ、合奏が完成した時の達成感や充実感を体験することができた。それはまさに、保育現場で子どもに育ててほしい能力や姿そのものであると考えられた。

キーワード：表現教育、総合的音楽活動、手作り楽器、幼児教育方法論

I はじめに

本学幼児教育学科において「保育内容／表現」は、Ⅰ（身体表現）Ⅱ（音楽表現）Ⅲ（造形表現）に分かれ、互いに関連し合いながらもそれぞれが独立した授業をおこなっている。

筆者は、幼児教育の現場では、ⅠⅡⅢの3つがどのように関わり合うのが望ましい表現教育であるのか、また、筆者の担当科目「表現Ⅱ」は、1年前期に開講されるため、幼児教育を学び始めたばかりの学生に対してどのような指導が望ましいのかを模索してきた。

弘田龍太郎が作曲した童謡の研究を端緒に、弘田自身が創設した表現教育を特色とする「ゆかり文化幼稚園」（東京都世田谷区）の存在を知り、2016年から2017年にかけて、日常の園生活と「園庭発表会」「スポーツショウ」「造形展」「文化祭」の見学をさせていただき、日常の園生活の中でごく自然なかたちで音楽表現、造形表現、身体表現が一体となった表現教育がおこなわれ、のびのびと子どもらしく自己を表現する子どもたちの姿に新鮮な驚きと感動を覚えた。その教育の素晴らしさについては、教育実践研究第10巻（2017）と第11巻（2018）の中で述べた。^{1) 2)}

本文は、これらも踏まえて、筆者が「表現Ⅱ（音楽表現）」の中で実践してきた、総合的音楽活動について振り返り、表現教育のあるべき姿を論じたいと考える。

Ⅱ 授業実践

「表現Ⅱ（音楽表現）」の授業においては、幼児教育の現場で豊かな表現活動をおこなうために、学生自身には、手あそび、手話、絵かきうた、表現あそび、わらべうたあそび、リトミック、ボディパーカッションなどの楽器を用いない表現活動と、手作り楽器、ドレミパイプなどの楽器を用いた表現活動を体験してもらった。

これらの表現活動をおこなう際に、身体表現・造形表現とのつながりを常に意識した授業内容となるように心がけた。また、できるだけ多くの童謡に触れることができるように、さまざまな場面に童謡を用いた。

1. 手作り楽器

1) 製作：

製作では、主として子どもの身のまわりにもあるペットボトルを用いて楽器を作る体験をさせる。楽器作りに適した形状や固さを持ったペットボトル3～4本を各自で用意する。製作の前に過去の先輩の作品をスライドで見せることでイメージ作りに役立て、イラストの得意な学生の作成した作り方の説明プリントを配布し、作業工程を分かりやすく示した。

カスタネットの作業に用いるペットボトルカッターは、熱くなるため保育現場では子ども手の触れないところで使うように指導する。以下は、製作した楽器について説明する。

- ①マラカス — ビーズ、ストローや割り箸を短く切ったもの、他にビー玉、ボタン、小石、砂、小豆、米等、をペットボトルの中に入れる。口を上にして上下左右に振っても、口の部分に持ち手をつけて逆さに持って振ってもどちらでも演奏可能である。簡単に作る事ができ、入れた素材によって音の違いを楽しむことができる。
- ②カスタネット — 製作にあたっては「カッチンくん」³⁾を参考にした。ペットボトル2本の底を切りとり、切り取った底の部分の縁をマスキングテープで覆う。マスキングテープは粘着力と耐久性に優れており、子どもが縁で手を切らないための保護の役割も果たす。デザインの種類も多く、縁を飾るだけでペットボトルの底がカラフルな楽器に変身する。切り取った底の部分の2か所に穴をあけて8ミリ幅のゴムひもを通した中に手を入れ、片手ずつ持って両方の底の凸部分を打ち合わせて音を出す。幅広のゴムひもは手に食い込むことなく子どもでも安全に持つことができ、軽く打ち合わせるだけで硬質で大きな音が出る。軽いので細かいリズム打ちも容易にでき、底の部分の凸の形状によって発する音の違いも楽しめる。
- ③たいこ — カスタネット用に切り取られ穴の開いた底の部分に幅広のガムテープを皺の寄らないピンと張った状態になるように貼りつけ、たいこの叩く面にする。周りをガムテープやマスキングテープなどできれいに処理して仕上げる。叩く面をピンと張れば張るほど本物の太鼓のように響く。小型なので片手で持って叩くことができる。
- ④ばち — わりばしにペットボトルのキャップをマスキングテープやビニールテープを巻き付けて固定しマレット替わりにする。

⑤ペットブロック — 長さの異なる2つのペットボトルの口と口をマスキングテープやビニールテープで連結する。連結部分を片手で持ち、ばちの柄の部分で左右の胴体部分を交互に打つと、ウッドブロックのように「カン」「コン」と高さの異なる音ができる。

⑥ギロ — 全面に溝の刻まれたペットボトルをそのまま楽器として用いる。片手に持ち、胴体部分の溝をばちの柄の部分で上下にこすると、本物のギロのような音ができる。

完成した楽器は、ポスカ、クレヨン、マスキングテープ、ビニールテープ、ビーズ、モール、セロハン、色画用紙、折り紙、フェルト、毛糸、ストロー等、身近な材料で工夫し、幼児にふさわしいオリジナルのデザインやキャラクターを考えて飾りつけをする。

このような作業を経て、学生の工夫とアイデアと愛情が詰まった個性あふれる楽器が次々に誕生した（写真1）。

2) 楽器への名付け・記録

完成した楽器をスケッチし、マラカスの中に入れたものや飾りつけの工夫点を記録し、自分の楽器に名前を付ける。名付けによってこの楽器は世界にたった一つの「マイ楽器」となり、楽器に愛着を持ち、大切にし、同時にその後の演奏活動への興味を持たせる。

楽器製作後に学生から以下の感想が寄せられた。

- ・ ペットボトルからこんなに色々な楽器が作れることに驚いた。思ったよりも簡単に作ることができ、手作り楽器とは思えない良い音がした。
- ・ 楽器の飾りつけやキャラクターは、最初はなかなかアイデアが浮かばなかったが、作業をしていくうちにアイデアが次々に浮かんで来て、夢中で作っていた。
- ・ 工作は得意ではないが、子どもが喜んでくれるものを作ろうと思うと、楽しく作業することができた。
- ・ 工夫次第でどんどん個性的な楽器になっていくのが面白かった。
- ・ 世界にたった一つしかない自分だけの楽器を作ることができ、楽器が大切に思えた。
- ・ 楽器を作る楽しさは子どもにも伝わると思うので、自分が保育者になった時に、子どもと一緒に作りたい。
- ・ 手作り楽器は、中に入れるものや形状等によって、一人一人音が異なるのが面白い。
- ・ 自分で作った楽器で、みんなと合奏すると思うと、わくわくした気分になる。

3) 発表

みんなの前で自分の楽器を発表し合う。同じ楽器でもそれぞれ音色が異なるのは、手作り楽器ならではの面白さである。他の学生の作った楽器に興味を示し、アイデアに刺激を受けている様子が見られた。手作り楽器の大きな利点の一つは、壊れたら修理し何度でも作り直せることである。ペットボトルの本来の用途である飲料の容器とは異なる、楽器として使うことによる音の意外性を考える点でも、幼児教育の環境構成の一つとして意義が

あるのではないだろうか。このように、製作だけでなく、その後の記録や発表をすることにより、更に楽器を作ってみたいという意欲を喚起し、同時に、楽器を用いた音楽活動への興味を持たせることができると思われる。

4) 合奏

手作り楽器の中のカスタネットとたいこを用いてリズム合奏をおこなう。教材としては、カスタネットのための4部合奏曲《おさんぽカスタネット》⁴⁾を、手作りカスタネットとたいこのための2部合奏曲に短く編曲して用いた。

様々なリズムに、ほうや（カスタネット）とパパ（たいこ）の会話の言葉一つ一つをあてはめ、言葉に合わせて打つと、そのままリズム合奏になる。言葉をあてはめてリズム打ちをすることによって、楽譜を見ただけでは難しく思えるシンコペーションリズムや付点音符などの複雑なリズムも容易に打つことができ、暗譜で演奏することも可能になる。慣れたら、言葉を発せずリズム打ちだけをするので、心唱を身に付けることができ、休符や弱起を理解する助けにもなるのである。（楽譜1参照）

幼児に対しては、楽譜を用いずに言葉や絵などを用いて指導することが望ましいが、この方法は幼児が楽しみながらリズムを習得するのに効果的であると思われる。幼児教育の現場ではもっと短くシンプルな曲を用いることで子どもにも応用できると考える。

手作りのカスタネットやたいこは、大人数で叩いても耳にうるさくない響きであることや、軽量で幼児の弱力でも持ちやすく演奏しやすい。みんなで演奏すると、音量もあり、短いリズムにも素早く対応でき、幼児教育の現場に向いていると思う。また、カスタネットとたいこの合奏という形は、音色の異なる楽器の掛け合いの面白さ、息を合わせる緊張感、ぴったり合った時の達成感など合奏の醍醐味を味わうことができる。

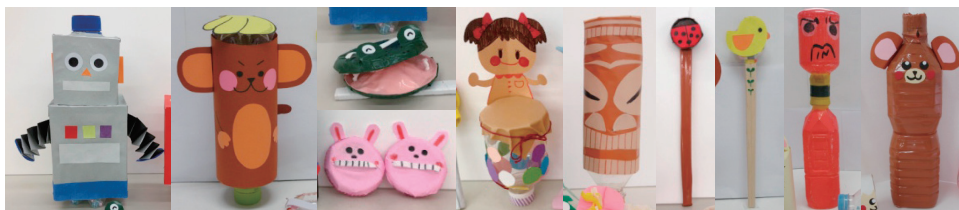


写真1 左から マラカス、カスタネット、たいこ、ばち、ペットブロック、ギロ

2. ドレミパイプの導入

ドレミパイプは1998年にアメリカで考案された3歳以上を対象とする知育楽器で、商品名とは別に、幼児教育の現場では「ドレミパイプ」と呼ばれている。ポリエチレン製の筒が長さによって「ドレミファソラシド」の音階に調整されていて、子どもにもわかりやすいように7音が虹の7色に色分けされている。床、机、椅子などを叩いて音を出す。大人の演奏グループは体の一部を叩いて演奏することもあるが、子どもには危険なので、幼児教育に使う場合には絶対に体を叩かないように注意喚起することが必要である。メロディー

演奏、リズムあそび、ハーモニーの演奏や合奏など様々な使い方ができる。

この楽器を用いて、次のような指導をおこなった。1人1本ずつドレミパイプを渡すと学生も喜んであちこちを叩きだす。しばらく床や椅子などを自由に叩かせ、ドレミパイプを耳に当て「ゴー」という空気の流れる音を聴くなどの遊びをおこなってドレミパイプに馴染ませる。馴染んだら、ドレミから順番にパイプを叩いて音階を確認し、音のよく響く部分や力の加減を自分で見つけさせ、次に色々なリズム打ちの練習を始める。また、主要三和音をそれぞれ同時に叩いて和音の響きを楽しむなど、ドレミパイプに親しむ導入の活動を丁寧におこなう。これは、幼児に対しても同様である。

次に、追いかけての代表曲《カエルの合唱》をドからラまでのドレミパイプを使って演奏する。メロディーが8拍ずつ遅れて次々に始まることで、自然に4重奏の曲になる。音が重なり美しい和音になっていく様子を耳と身体で直に感じることができる。

《きらきらぼし》では、ドレミパイプ用の譜面を作成した(楽譜2参照)。まず主旋律Aを演奏してみる。次に主旋律Aと3度下の副旋律Bをそれぞれが演奏し、2つの旋律が合わさってハーモニーが出来上がる過程を体感する。その旋律に合うように主要三和音をドレミパイプで演奏してみると、学生はハーモニーの美しさを改めて感じるようである。最終的に主旋律Aに、主要三和音で伴奏を付けていき、ドレミパイプだけで《きらきらぼし》が完成する。このような実践によってハーモニーの重要性にも自然に目覚めていく。

ドレミパイプの特徴は、1本で1つの音しか出せないことである。1人で持てるのは、1～2本に限られるため、1人だけで音楽を完成させることはできない。他の人の出す音を集中して聴き、自分の音の入るタイミングを計り、よい音が出る叩き方を工夫し、皆で協力して初めて音楽を完成させることができる。そのため、仕上がった時の達成感是非常に大きいと言える。

3. 総合的音楽活動

1) 手作り楽器、ドレミパイプ、歌唱の総合的活動

ドレミパイプを用いた合奏を体験した後に、《南の島のハメハメハ大王》を歌いながら、手作り楽器とドレミパイプの合奏との総合的活動をおこなう⁵⁾(楽譜3参照)。

幼児の合奏で大切なことは、みんなで一緒にすると楽しいという体験であり、個々の演奏が難しすぎない配慮が必要である。この曲で手作り楽器で演奏するリズムは、各々の楽器がそれぞれ2種類の簡単なリズムパターンを繰り返す。5種類の楽器がそれぞれに受け持ったリズムパターンを打つことにより、合わせると自然に5重奏の合奏が出来上がる。ドレミパイプは、前奏と後奏の部分ではメロディーを担当し、歌の部分では、《きらきらぼし》と同じように和音を演奏して伴奏を担当する。始めは、自分のパートの演奏に必死で他のパートを聴く余裕はないが、徐々に他のパートを聴き合うことができるようになり、歌いながらの演奏も可能になる。

手作り楽器の音色は1つ1つは本物の楽器には及ばないが、皆の音が合わさると、十分

に聴きごたえのある合奏になる。自分で作った楽器の演奏は、おもちゃで遊んでいるような感覚もあり、自然に笑顔になり音楽に合わせて体も動く。皆で気持ちを合わせて終わりまでやりきると、心から音楽を楽しめ達成感も感じられる。また、手作り楽器やドレミパイプはカラフルで見た目にも華やかで、楽しい雰囲気を盛り上げるのに一役買っている。

2) ドレミパイプ、表現あそび、歌唱の総合的活動

この活動には《ドレミの歌》を用い、指導は、筆者がドレミパイプ用に作成した譜面でおこなった。(楽譜4参照)。この曲は、音の名前がそのまま歌詞になっているので、音を意識しながら叩くドレミパイプには適しており、音の跳躍も少なく歌いやすい曲でもある。

歌詞の中で「ドはドーナツのド～さあ、うたいましょう」の部分と後半の「どんときにも～さあ、うたいましょう」の部分は歌いながら表現あそびをおこなう。体を動かすことによって、歌詞が内容とともに自然に体の中に入り、同時に歌の持つリズムも体感できる。

後半の「そらをあおいで～しあわせのうた」の部分は、AとBに分かれて、Aの後をBが追う「追いかけて歌」の形式をとっている。楽譜に書くと難しく感じる部分であるが、表現あそびで動きをつけながら歌うと後から入るBのタイミングも容易にできる。

カタカナで表記された音の名前の部分はドレミパイプで演奏する。ドレミパイプをそれぞれが1本ずつ持ち、椅子の背部分を叩いて演奏する。自分の持っている音が何の音でどこで打つのかはしっかりと覚えなくてはならない。また、途中で音を短く刻む伴奏AとゆったりしたメロディーBに分かれて演奏する部分や、音階の上昇や下降が何度もある。4分音符はゆっくりでよいが、8分音符の部分はタイミングよく素早く叩かなければならない。このように、ドレミパイプは、楽しいが、大変集中力を必要とする楽器でもある。

「さあ、うたいましょう」の歌詞の後に、前半部分には4拍、後半部分には8拍分の休符があり、ここは心唱の部分である。このように、《ドレミの歌》の演奏は、ドレミパイプ演奏と身体表現伴った歌唱などの様々な要素をミックスした複雑な音楽活動になるが、この中で、学生は、リズム感を養い、タイミングを計るために他を聴くという音楽に必要な力を身に付けていく。皆が演奏に集中し、気持ちを合わせて終わりの速い上昇旋律が決まった時は、思わず学生の間から歓声上がるほどの達成感や爽快感を持つようである。

3) 発表

表現の授業のまとめとして、子どもの前での発表という場面設定でグループごとに発表をおこなう。1年の前期で、まだ慣れていないものの、後期へのステップとして子どもへの言葉かけも経験させる。

第1部は、楽器演奏を伴わないもので、手あそび、童謡を歌いながらの表現あそび、リトミック、ボディパーカッションの発表である。表現あそびとリトミック、ボディパーカッションでは学生がピアノ伴奏も受け持つ。

第2部は、上記の手作り楽器とドレミパイプと歌唱の総合的活動をグループごとに発表し（写真2）、最後に全員で《ドレミの歌》を演奏した。

表現の授業の始め頃には、表情も動きも硬く、前に出て発表するのとても苦手だった多くの学生から、発表会の後には以下の感想が聞かれた。

- ・みんなの前で発表することが楽しく感じられるようになり自然に笑顔でできた。
- ・動きをつけながら童謡を歌うと、歌詞が自然に体の中に入ってくるのが実感できた。
- ・音楽の楽しみ方にこんなに色々な方法があるということは驚きだった。
- ・他の班の発表を聴くのが、とても勉強になった。
- ・全員での合奏は合わせるのは難しいが、共に作り上げ完成した喜びが大きかった。
- ・手作り楽器で合奏すると、音楽の苦手な子も楽しんででき、好きになると思えた。



写真2 手作り楽器とドレミパイプの演奏

Ⅲ 子育て支援での発表

2011年から2015年まで、計5回にわたって、子育て支援事業「親子ふれあいタイム」（就実大学模擬保育室・就実こども園ホールで実施）に学生が参加し、前半は、表現Ⅱの授業でおこなったさまざまな音楽表現活動を子どもの前で発表し（写真3）、後半は参加の親子と触れ合う活動をおこなった。プログラムは以下の曲の中から選んで作成した。

- ・手あそび：
《ちょきちょきとこやさん》《あたまかたひざぼん》《あおむしでたよ》《わにのうた》
《のねずみ》《きつねくとねずみちゃん》
- ・表現あそび等：
《手のひらを太陽に》《山の音楽家》《どんぐりころころ》《小さな世界》《ロックマイソール》⁶⁾《おつかいありさん》
- ・手作り楽器とドレミパイプの合奏と歌唱：
《おさんぼカスタネット》《南の国のハメハメハ大王》《ドレミの歌》

学生は、親子や保育者の前での発表に初めは緊張しているが、子どもたちがわくわくしながら待ち、始まると同時の元気なあいさつ、学生の動きを見つめて手あそびのまねをし一所懸命歌を覚えて歌う姿、音楽に合わせて体をゆらしたりして楽しんでくれる様子に促

され、次第に緊張がほぐれ笑顔で発表することができた。

発表後は、学生も子どもと一緒に遊び、ふれ合う時間を楽しんだが、子どもたちは手作り楽器に大変興味を示し、渡してあげると自分で楽しそうに叩いたり、さわったり音や感触を楽しむ様子が見られた。また、ペットブロックが、片方ずつ違う音がするのに気づき、「こっちはカンッて音、こっちはコンッて音がするね」と教えてくれる子どもや、ドレミパイプに大変興味を示し、床を叩いて音を鳴らす子どももいて、学生は、子どもは音が鳴るものや叩くことが本当に好きなのだ実感することができ、自分たちの作った楽器に予想以上に興味を示してくれたことに驚きと大きな喜びを感じていた。

授業で学んだことを、実際に子どもたちの前で発表し、間近で反応を見ることができたことは、参加した学生にとって大変貴重な経験だった。

こども園の先生方も手作り楽器に興味を持たれ、「園児たちにも演奏させたい」と、ペットボトルでカスタネットを作られ、園の発表会で子どもたちが演奏したそうである。



写真3 「就実親子ふれあいタイム」での発表

IV 考察

幼児教育における「保育内容／表現」は、音楽・造形・身体が融合したものであり、子どもには、遊びの中で感性を育てる保育をすることが望まれている。「表現Ⅱ」において、学生は授業で音楽的要素を含んだ様々な遊びを体験し、その実践的学びによって現場での豊かな音楽活動を形成するための基礎的能力を会得するのである。そのような様々な遊びを、本稿では、楽器を用いない音楽活動と楽器を用いる音楽活動に大別した。

楽器を用いない音楽活動は、手あそびに始まり、表現あそび、リトミック、ボディパーカッション、わらべうたあそび等があり、いずれも音楽活動であると同時に身体表現活動と強く結びついている。筆者は、これらの活動をおこなう際に、表現あそびではもちろんのこと、リトミックやボディパーカッションについても、できる限りその活動に合ったリズムやテンポを持った童謡を選んだ。歌いながらあるいは歌を感じながら活動することを通して多くの童謡に触れていくことは、とても大切なことである。日本は大正時代から現在まで100年の間に他に類を見ないほど数多くの子どものための歌が作られてきた。心を込めて書かれた子どもの心情に寄り添った歌詞、季節や自然を歌った美しい言葉に、美しく、楽しく、元気な、あるいはゆったりとした旋律が付けられ、様々な曲が生み出されているにもかかわらず、現場で歌われているのは、ほんの一部にとどまっているのは残念なことである。そもそも保育者自身があまり童謡を知らないからではないかと思われる。毎

年、「表現Ⅱ」の授業の初めに代表的な童謡100曲を挙げ、知っているか尋ねてみるが、聴いたことはあるが歌ったことはないという学生は多い。学生には、幼児期に歌を歌うことによって、肺機能の発達、言葉やリズム感の獲得、豊かな感性等多くの能力が育つことだけでなく、童謡の持つ深い意味や魅力や価値に気付いてほしいとの思いからも、表現活動の様々な場面に童謡をできるだけ多く用いることを心掛けた。

次に楽器を用いる音楽活動において、手作り楽器の製作活動自体は、身近な素材を用いて作り上げる造形活動である。しかしながら楽器を手作りする過程で、楽器作りに集中し、どうすればよい音が出るのかあれこれ工夫し、想像力や創造性を働かせて飾り付け、完成したところから、今度は楽器を用いて演奏する期待感に胸をわくわくさせることで、自然に音楽活動に移行するのである。

この楽器活動では低年齢児には、鍵盤楽器ではなく、まず打楽器から取り組ませるのが良いと思う。それは、子どもたちにもともと備わっている優れた聴く力を、まだ演奏技術が未熟であるメロディー楽器を演奏することで混乱させてはいけないからである。特に正しい指使いで正しい音を押さえないといけない鍵盤楽器は上手な子どもとそうでない子どもの優劣がつき、難しく感じる子どもにとっては楽しくない時間になってしまう。しかしながら、打楽器は優劣がつきにくくリズムだけに集中することができる。特に手作り楽器は、気軽に手に取ることができ扱うのも簡単で、おもちゃで遊ぶような感覚で楽しく取り組みながらリズム感を育てることができる。

手作り楽器には、叩く、こする、ふる、打ち合わせるなど様々な演奏方法があり、ペットボトルの中に入れる素材やペットボトルの形状の違い、たいこの叩く面のガムテープの張り方などの工夫、楽器の特性等によって様々な音の違いがあることの発見、何回でも作り直すことができる手軽さ等、多くの魅力がある。

また、音楽には様々な表現方法があるため、様々な楽しみ方がある。たとえば、リズムに言葉をあてはめることによって、楽しく簡単にリズムを覚えられることや、他人の音をよく聴いて自分の音を出すタイミングを計ること、音と音とが混じり合い、響きが調和していく様子を楽しむこと、合唱・奏、模倣唱・奏、交互唱・奏などがある。他にも、周りの友だちと協力して1つの曲を作り上げていくことの楽しさ、歌いながら楽器を演奏したり表現あそびをするなど2つの動きを同時にすることによって、脳の働きはより活性化するのである。

さらに、打楽器とメロディー楽器の要素を併せ持つドレミパイプの演奏を導入することで、1人1人が、相手の音をよく聴きながら打楽器のように叩いてメロディーを作り上げていくという面白さが加わる。一方、ドレミパイプは和音を作ることのできる楽器でもあるので、ハーモニーを感じることもできる。

このような様々な活動を組み合わせた総合的な音楽活動を通して、学生には好奇心、想像力、創造性、思考力、集中力等の知的側面、達成感、充実感、豊かな感性等の情緒的側面、呼吸循環機能の発達等の身体的側面、協調性等の社会的側面等がより身についてくる

ように思われ、それはまさに、遊びを通して子どもに育ってほしい能力そのものである。

幼児教育における音楽表現活動は、あくまでも保育の中の一部であるという意識を常に持つことはとても重要である。音楽活動として設定された特定の時間だけに活動をするのではなく、1日の生活のあらゆる場面に、無理なく自然な形で音楽表現活動を溶け込ませていく工夫が、保育者に求められるのではないだろうか。たとえば、楽器作りを楽しんだ後、幼児が作った楽器を保育室の各々の道具箱に入れておいていつでも気軽に取り出して音を鳴らして遊ぶことができる環境、一日の活動の合間にみんなで楽器遊び、リズム遊びをしてみる等、楽器というものに慣れ親しみ、楽器を用いて遊ぶことの重要性は大きいと考える。また、そこには常に歌いながら、心を解放しながらという活動がとても重要だと思われる。

多くの学生が、このような総合的な音楽活動を通した「表現Ⅱ」を受講して、今日は何をするのだろうと毎回わくわく感を持ち、音楽がより大好きになり、自分たちの感じる楽しさを子どもたちに体験させたいと願い、周りの友人と笑顔で自然に打ち解けることができ、楽しみながら知識や能力を身につけ、みんなで協力する大切さを学ぶことができたのではないだろうか。筆者自身もこのような総合的な音楽活動を正直楽しんでおこなうことができたと言うことができる。何よりも、学生の表情や動きが、授業回数を重ねるごとに、明るく、楽しげに、のびのびと解放されていくのを見るのは嬉しいことであり、これこそが学生達が保育者になり、その保育現場の子どもたちに育ってほしい姿なのではないだろうか。

引用・参考文献

- 1) 秋山真理子 (2017) 幼児期における表現教育 一ゆかり文化幼稚園を訪問して 就実教育実践研究第10巻pp.153-164
- 2) 秋山真理子 (2018) 幼児期の表現教育 就実教育実践研究第11巻pp.1-9
- 3) 大庭三枝、村山ひろみ (2008) 伝統芸能「二上りおどり」と運動教材「二上りリズム」一鳴り物としての「四つ竹」と「カッチンくん」の可能性 福山市立女子短期大学研究教育公開センター年報 (5), pp.1-6
- 4) 《おさんぽカスターネット》細田真衣子作
細田淳子 著 (2006) 「わくわく音遊びでかんたん発表会」すずき出版 pp.66-69
- 5) 板野平 監修 神原雅之 野上俊之 編著 (1987) 「ダルクローズ教育法によるリトミックコーナー」チャイルド本社 pp.178-181
- 6) 神原雅之 編著 (2008) 「世界の歌を遊ぶリトミック・ゲーム67選」明治図書 pp.82-83

ドレミの歌

ドレミパイプ+うた+表現あそび

○ **ド** シ ラ ファ シ ソ **ド** ソ ミ レ

ドレミパイプ

ド は どーなつ の ど
 レ は れもん の れ
 ミ は みんな の み
 ファ は ふあいと の ふあ
 ソ は あおいそら
 ラ は らっぱ の ら
 シ は しあわせ よ

うた
表現あそび

○ さあ う た い ま しょう (2 3 4 ← 心唱)

○ ド レ ミ ファ ソ ラ シ **ド** **ド** シ ラ ソ ファ ミ レ

ド ミ ミ ○ ミ ソ ソ ○ レ ファ ファ ○ ラ シ シ ○

A ドミミ○ミソソ○レファファ○ラシシ○

ドレミパイプ

A ドミミ○ミソソ○レファファ○ラシシ○ B ソ ド ラ ファ

A ドミミ○ミソソ○レファファ○ラシシ○ B ミ ド レ ○

A ドミミ○ミソソ○レファファ○ラシシ○ B ソ ド ラ シ

ド **レ** **ド** シ ラ ソ ファ ミ レ

どんなときにも れつをくんで みんなのしく ふあいと もって

A そーらをあおいで B あおーいーで

A らーららららら B ららららら

A しーあわせのうた B うーた

うた
表現あそび

○ さあ うーたーいーまーしょう

(2 3 4 5 6 7 8 ← 心唱)

○ドレミファソラシ**ド** ソ **ド** (みんなで)

ドレミパイプ

楽譜4 《ドレミの歌》